

平成26年度 広島文化学園子ども・子育て支援研究センター公開講座要旨

子どもの発達と音楽

東京未来大学こども心理学部教授

講演者：竹内 貞一（たけうち ていいち）

日時：平成26年11月29日（土）

場所：広島文化学園 広島 長東キャンパス音楽講義室

竹内 貞一氏のプロフィール

東京学芸大学教育学部音楽科卒業

東京学芸大学教育学研究科音楽教育専攻修了

早稲田大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程修了

臨床心理士。大学院在学中より、子どもの心理臨床に携わる傍ら、音楽心理学、音楽教育、芸術療法に関する研究に携わる。

はじめに

本日お話をさせていただきます内容を大きくまとめて申し上げます。「人間と音楽は切り離せないものなのだ」ということです。それを「生まれる前」と「生まれてから」、この2つの時期に分けて、音楽と人間の発達の関わりについてお話したいと思っております。

1. 人間の発生と音環境

人間は、生まれる前から音・音楽と関わっています。人間と音楽のつながりの根源の部分です。ある人に言わせると“Urmusik”というのだそうです。ドイツ語で“ur”というのは「もともとの」とか「源の」という意味があります。そこでこの“Urmusik”を「原初音楽」と邦訳している例もあります。胎生期、おなかの中で赤ちゃんが活動を始めた頃から音・音楽に触れていきます。そこから考えていきたいと思っております。

発生と聴覚の発達

まず、胎児期の聴覚能力の発達ですが、胎生28週～31週の頃、だいたい妊娠7ヶ月頃から、聴

覚器官が出来上がってきます。耳の形などほぼ完全に出来上がっています。しかし耳ができたから音が聞けるようになるというわけではなく音を音として認識するための脳内ネットワークが完成する必要があります。それがだいたいこの8ヶ月くらいからと言われています。

実際、胎生8カ月～10カ月の胎児は外からの音に対反応すると言われます。話しかけたら赤ちゃんが動いたり、見知らぬ人がやってきてお話をすると、おなかの中の赤ちゃんが緊張したように動くというような事を経験された方もいらっしゃるかもしれません。

胎教という発想

このように、外からの音に反応するということから出てくる発想が胎教です。視覚的には閉ざされている胎児にとって、唯一アクセス可能な手段は「音」「聴覚刺激」になります。音を通して私たちは胎児に何かを伝えられる、胎児は反応できるということから「胎教」という発想に繋がってくるわけです。

さて、胎教でW. A. モーツァルトの曲を聴かせ

ると生まれた子どもの知能が高くなる、あるいはよく育つ、情緒が安定する、数学が得意になるといような話を聞いたことはありますでしょうか。俗に「モーツァルト効果」としてよく紹介されています。これが本当かどうかは別として、この話から考えてみたいことがあります。

音楽による効果があるという場合、二つのルートが想定されます。その一つが「直接ルート」もう一つが「間接ルート」です。

まず「直接ルート」です。これは音楽が直接胎児に届くルートを意味しています。皆さんもご承知の通り、音というのは空気振動です。太鼓とか、大音量のスピーカー音は、お腹にズシズシ響く振動が伝わってきます。音楽というのはコントロールされた空気振動の集合体、時系列的に生起する統制された空気振動であると極言する人もいます。その空気振動が妊婦さんのおなかにあたり、振動が羊水をとおして胎児に伝わります。胎児に伝わった音によって、直接的におどろいたり、不安になったり、もしくは、安心したり、ということが考えられます。おなかの中にいる胎児にどれほど音が伝わるのかという疑問があるかもしれませんが、実は子宮で羊水の中にいる赤ちゃんにはかなりクリアに音が伝わっているのです。腹壁部分を通るので、高音域はやや減衰しますが、胎児にはよく音が伝わっています。

音というのは、空気中を伝わるよりも水中を伝わる方が伝導率が高いのです。たとえばクジラが歌を唱うという話をご存知でしょうか。求愛の歌をオスが唱います。このクジラの歌、仮に高知沖あたりからであればフィリピンまで、大凡3000km離れたメスに届くと言われていています。ほぼ、地球規模でラブソングを交換しあっている感じです



ね。日本の地上でどれだけ叫んでも、フィリピンまでは届きません。イルカの視力は人間でいうと0.1程度しかないと言われていています。しかし、クリッカーと言われる声を出しながらその反射音を感知して、障害物の有無、エサになる魚との距離を把握しています。潜水艦もクジラやイルカと同様、水中では海底の地形や相手との距離を測るのに探信波という音波を使っています。

これらの事例は、水中はとでもよく音が伝わることを表しています。つまりおなかの中の胎児にも羊水を通してクリアに音が伝わっているということです。「直接ルート」というのは音の空気振動が直接母親のお腹に当たり、その振動が子宮内の羊水を効率よく通り、胎児にダイレクトに届くということになります。

もうひとつのルートが「間接ルート」です。音楽を聴く時、胎児だけに聞かせるというのは不自然で、普通は母親と一緒に聞くことになります。すると母親の方に、音楽による情動変化が生じます。情動・感情反応というのは内分泌の変化を伴います。心の問題なのですが、心は内分泌で色々と変化しているのです。母親の内分泌の変化は、臍帯を通して赤ちゃんにも伝わっていくというルートが想定されています。音楽によって母親の気持ちが変わると、それにつれて胎児がその影響を受けます。つまり、気持ちの変化を受け取るという事がわかっています。例えば、母親にヘッドホンをつけて、気持ちが穏やかになる音楽を聴いてもらおうと胎内の赤ちゃんが指しゃぶりをするという話があります。逆に、母親が常にイライラしていたり、不安だったらどうでしょうか。その内分泌は子どもにどのような影響を与えるのでしょうか。つまり音楽によって母親の気持ちが変わる事で、胎内にいる胎児が、その気持ちの影響を受けていると考えられているわけです。

「直接ルート」「間接ルート」という2つのルートを紹介しましたが、私としては別の理由から「間接ルート」を重要視した方が良いのではないかと考えています。それは、おなかの中の赤ちゃんのために何かしようという気持ちの表れです。妊娠期間中から、その様な行動をとり続けることが、より具体的に赤ちゃんのためにという行動につながっていくと考えられます。胎児と母親の間に1対1の特別な時間を作ろうという気持ちが生

まれます。それが、実は生まれてからの愛着形成に大きな影響を及ぼすのではないかと考えているからです。

そこで、今の時点で分かっている諸説を元に、音楽胎教について気を付けておきたいことをまとめました。

まず、モーツァルトでなくていいです。ジャンルに関係なく、母親の好きな音楽でいいのです。胎教のために嫌いな曲を聴く必要はないのです。クラシック音楽が苦手という人は大勢いると思います。その人達が、子どものためにと正座して聴く必要まったくありません。それでは忍耐です。余計にイライラしてしまいます。胎教のために嫌いな曲を聴くのではなくて、好きな曲を子どもの為にとという態度で聴くことが一番良いのではないかと思います。

もう一つは母親自身が、聞いていて穏やかな気持ちになれる曲が望ましいということです。それが母親自身の内分泌の安定というものにつながり、最終的には赤ちゃんに影響する可能性が指摘されているわけです。

ただし、いくら母親が好きな音楽で良いとは言え、大音量で激しいビートがおなかを刺激する曲では胎児を驚愕させるので、避けるべきであろうと考えています。その大切さを指し示す実験があります。アメリカの大学で行われた実験です。その実験では、胎児期を牧歌的でのどかな田園地帯で過ごして生まれてきた赤ちゃん50人と、轟音とどろく空軍基地の官舎で胎児期を過ごして生まれてきた赤ちゃん50人を集めました。計100人の赤ちゃんを一つの部屋で100台のコットで寝かせます。大凡みんな落ち着いて、寝ている子もいる状態になったタイミングを見計らって、突然、道路工事の音、ガガガガッという音をスピーカーで流すのです。その時に泣いたグループと泣かなかったグループがありました。ほとんどの赤ちゃんが一斉に泣きだしたのは、胎児期を田園地帯で過ごしてきたグループでした。空軍基地の官舎で胎児期を過ごした赤ちゃん達で泣いたのはごく少数。ほとんどの子は泣かなかったということでした。これは、お腹の中にいる段階で大音量に慣らされ、生まれた段階では、既に音に対する感受性の一部が低下していると見る事ができるわけです。したがって、どんなジャンルのものでも大音

量で聴くのは、この時期は避けておいたほうが良いのではないかと考えます。

胎教というのは音楽の直接的な力ではありません。音楽の神秘の力が胎児の成長を促すという考え方には根拠がありません。それよりも胎児と母親の間に早期の愛着関係が成立すること、これが生まれた後の実生活の中での愛着関係に密接に結びついていくだろうという事です。ここを大事と考えてください。モーツァルトを聴かせると知能が高くなるということよりも、生まれる前の段階からこの子のためにとという気持ちを持って育てている母親やご家族が、生まれた後の赤ちゃんのために、いろいろなことをなし得る素地が出来上がっているために養育が適切になっていく可能性がある、その結果、子どもがよく育つ可能性があると考えられるのではないのでしょうか。

胎生期の音環境

そもそもお腹の中の音環境というのはどういう環境なのでしょう。それを考える時に一つ参考になるのが「あなたは赤ちゃんを抱くときにどのようにしますか」という質問なのです。いま仮に、皆さんの目の前に生後数ヶ月の赤ちゃんがいるとしましょう。その赤ちゃんを寝かしつけるとしたら、皆さんはその赤ちゃんをどのように抱っこするのでしょうか。抱っこしている姿勢を実際にやってみながら状況を想像してみましょう。



いま、その赤ちゃんの頭の位置に注目してください。赤ちゃんの頭は自分の右胸のほうにありますか、それとも左胸のほうにありますか。実際、この会場の皆さんも、圧倒的に左胸に頭が来るように抱っこしています。実は、ほとんどの母親が赤ちゃんの頭が左胸にくるように抱くとされていて

います。Salk, L. (1973) の研究で225人の母親を観察した結果、明らかになったことです。母親が右利きであるか、左利きであるかは関係なく、約80%の母親は左胸に赤ちゃんの頭がくるように抱っこして寝かしつけの行動をするということが確認されているのです。

ではなぜ、左胸に頭で抱っこしたのでしょうか。どこかで、赤ちゃんを抱くときは左胸に頭が来るように抱きましょうと習いましたでしょうか。誰からも習っていないのに自然にそうしているのは、おそらくそこに無意識が関与していると考えられます。かつて、自分がそうしてもらっていた経験とか、それから生じた安心であるとか、あるいは生まれる前にどういう音環境であったのかということ。それらとの無意識的なつながりが人をその様に行動させるということなのでしょう。

人が赤ちゃんを左胸に頭で抱っこすることについては、2つの理由が考えられています。一つは、「自分の心臓は大切。赤ちゃんの頭も大切。だから大事な物を左胸でまとめて守っている」という考えです。

もう一つの理由は、おそらく心臓の拍動と関係しているだろうという考えによるものです。母親は、自分の心臓の拍動を赤ちゃんに感じさせようとしているというものです。私はこちらに賛成しています。それはなぜか、皆さんにもう一回ご協力頂きたいと思います。皆さん、先ほどと同様に赤ちゃんを抱っこする姿勢をとってみてください。すると、頭を左腕のところに乗せるようにして抱きかかえていると思います。その時、反対側の右手は何をしていますか。お尻とか背中とか腰のあたりをトントンと叩いてパルスを送っていることに気づきます。これも誰に頼まれるともなく、無意識に行っています。このトントンと心拍には関係があることが分かっていて、赤ちゃんに何とかして自分の心拍を感じさせようと私たちが無意識に行っていることなのです。一度出てきたら赤ちゃんは胎内には戻せません。もう戻せないけれど、出てきた赤ちゃんをなんとかお腹の中にいた時と近い環境で寝かしつけようという無意識が働いているのです。

では、心音には子どもに対して、安心・安眠を与える効果があるのかということですが、室岡一

先生の研究がそれを明らかにしています。室岡先生は周産期医療分野ではとても大きな貢献をされた方です。室岡先生が1975年に発表した研究では、母親の子宮の付近で採取した「胎内音」を聞かせると、激しく泣いている赤ちゃんでも、すっと寝るという現象を確認しています。母親の子宮の付近で採取した音です。その「胎内音」は、心音・脈拍・血流音が混ざった音です。実際、皆さんには室岡先生が使っていたのと同様の胎内音を提示いたしますが、シュシュツという脈の音、ゴーという血流の音が聞き取れると思います。これは胎内、子宮口付近で採取された音です。大人は誰もこの音を覚えていません。「思い出せる記憶」としては私たちに残っていないからです。このような音を赤ちゃんは10ヶ月くらいの間、おなかの中で聴いてから生まれ出てくるのです。このリズムや音響が、まさに人間にとっての“Urmusik”すなわち「原初音楽」と言えるのでしょう。

この「胎内音」環境は、羊水を通して全身を撫でるような体感音響振動として、赤ちゃんには伝わっています。そのテンポは「ゆらぎ」を含んでいます。音の周波数成分としてはピンクノイズに近いとも言われています。高い周波数成分は弱く、そして低い周波数成分ほど強くなります。

先ほど「思い出せる記憶としては私たちの記憶に残っていない」と申し上げましたが、人間はその音環境を「無意識」の領域に「快感」の潜在記憶として保持していて、「無意識」にこの環境に戻りたいと願っています。覚えているかと問われれば「胎内音」など覚えてない。しかし、この音環境に戻りたいという気持ちを持ちつづけているのです。そのことが現れるのは次の例のようなものです。



「胎内音」と同じピンクノイズは、例えば海の波の音、滝の音、川のせせらぎの音にも含まれています。水辺にいとととても落ち着いた気持ちになります。リゾート地の立地が水辺に多いことにも頷けます。森林浴で溪流沿いをトレッキングしたりする人もいるかもしれません。

胎内に戻りたいという無意識の欲求に基づく現象を「母胎退行 (uterus regression)」と言います。母胎退行について最初に言ったのはRank, O. という精神分析学者でした。Rank, O. は「出生外傷 (birth trauma)」という説を唱えたのですが、その中で、「出生外傷」とは、胎内という究極に安心できて気持ちの良い環境から、光と騒音と温度変化などのストレスに溢れているこの世の中に引きずり出されたという経験が、人生で最初の、かつ最大のトラウマであるとする考え方です。そのトラウマから、人は胎内に戻りたいという母胎退行の欲求を強く抱き、行動するのだと説明しています。原始人はなぜ洞穴に住んでいたのでしょうか。私たちは、なぜ夜寝るときに明かりを消すのでしょうか。神社などで行われる神事に「茅の輪くぐり」という古い伝統習俗もあります。神話にルーツがあるとされますが、これは産道を表す輪をくぐり抜け、再度この世に生まれ出ることを表していると見る向きもあります。沖縄の亀甲墓も、子宮から生まれ子宮に戻るという「母胎回帰」を表しているといわれます。

私たちの身の回りでも、赤ちゃんや子どもの行動を見ていると、母胎退行に基づく行動がよく見られます。押し入れの中に入っていたり、蜜柑箱の中や学校のロッカーの中に、身体を縮み込ませて本を読んでいたたり、なぜわざわざ狭いところに行くのだらうと思うことはありませんか。

母胎退行を治療に使っている例もあります。Vogel, B. というドイツの音楽療法士が、胎内を模したPränatalraumという装置を用いて脳性麻痺などで生じるアテトーゼ (不随意的筋緊張) を軽減することに成功した事例を紹介しています。この装置はドイツ語でPränatalraumと記されています。無理に日本語訳をすれば「出生前空間」という意味になると思います。天蓋がついた空間になっています。まさに子宮の中を表しているわけです。そこにウォーターベッドが設置され、寝ている人は浮遊感を感じます。胎児が羊水に浮い

ているようです。そのベッドにはボディーソニックの音響装置が付いています。音楽が振動に変換されウォーターベッドを通して寝ている人に伝わります。低い音ほど強い振動になるように変換されます。胎児が「胎内音」を「体感音響振動」として感じていたのと非常に似た状態です。その状態でオイルマッサージをほどこします。「母胎退行」による深いリラクセス状態を与えることによって、アテトーゼを緩和でき、関節の可動域を広げる施術をすることによって、リハビリにつながっているのです。



<http://www.tasso.com/wasserbetten/systeme/praenatal.html>より転載

私たちの生活の中にも「母胎退行」を実感する瞬間はあります。電車などに乗るとなぜか眠くなることはませんか。実は電車というのは母体退行を引き起こしやすい条件がそろっているのです。

車体が箱状になっていて、レールの継ぎ目がガタンガタンと拍動的なりズムを生じさせます。レールからのゴーという振動は、全身に伝わってきます。胎内の環境と非常に近いことがおわかりいただけますでしょうか。ですから前日しっかり寝ていても、先ほどまでバリバリ仕事をしていても、電車に乗るとなぜかとても眠くなることがあるわけです。夜泣きが酷い子を、ドライブに連れてくと、車に乗ってる間はどうにか泣きやみ、ようやく寝たと思って、家に帰り駐車場に車を止めて、エンジン切ると、また大泣きするという話はよく聞かれます。つまり電車の中で寝ている人も、夜泣きをドライブで落ち着けている子ども

も、胎内の環境を再体験していると考えられます。つまり、母胎退行しているということです。母親のお腹の中に戻りたいという欲求を充足させているのだと考えてみて下さい。電車の中で、大きな口を開けて寝ている人、車窓に頭をガンガンに打ち付けながらでも絶対起きない人は、それだけ深いレベルの瞬間的な眠気に誘われているのです。つまり、母体退行欲求を、電車による体感音響振動が満たしてくれているわけです。今日、この後の帰り道で、電車に乗られる方、バスに乗られる方もあると思います。もし、大口をあけて、頭を窓にガンガンぶつけながら寝ている人を見かけたら、「あの人は母胎退行しているのだ」と思って見て下さい。きっとまた違った見方ができると思います。

2. 乳幼児の音楽的発達

前半は、生まれる前の音環境と胎児の関わりを中心に見てきました。後半は、生まれてからの話をしたいと思います。

乳幼児の音の探索

人間はだいたい、生後11週から12週のところで、人間の声とそれ以外の声を聞き分けると言われています。選好判断という方法でそれを明らかにします。赤ちゃんを寝かせて、その上に2つのスピーカーをぶら下げます。片方のスピーカーからは信号音ができるようにし、もう片方からは「おーい」という人間の声ができるようにしておきます。人間の声ができるスピーカーを右に持っても左に持っても、赤ちゃんはそのスピーカーの方に、一生懸命顔を向けようとするのです。人間は興味のあるものに目を向け、嫌いなものには顔を背けます。明らかに人間の声は乳児から好まれていることが分かります。乳児はどちらが好きか言葉で教えてくれませんが、行動から明らかにします。

生後14週だいたい3ヶ月の中ぐらいになると、人間の声の中でも母親の声を特に好むことが分かっています。先ほどの実験と同じように、今度はスピーカーを3つぶら下げます。それぞれ母親の声、別の女性の声、父親の声。母親の声ができるスピーカーをどこに移動しても、かならず母親の声のするスピーカーの方に顔を向けます。

これらのことから分かるのは、母親と乳児の特別な関係ということに加えて、乳児がすでに音や声の特徴を聞き分けることができること、特定の音・声に対する好みを持っているということです。

母親語と乳児の反応

「母親語 (motherese)」という独特の話し方があります。一頃、「育児語 (baby talk)」と言い換えようという動きもありましたが、どうやら定着しなかったようです。どのような話しかけ方かといいますと、誰でも小さな赤ちゃんに話しかける時には独特の抑揚で話します。犬猫を飼っている人も、ペットに対してとても優しい言葉かけをします。基本的には同じ現象です。トーンが高く、とても抑揚に富んだ話し方をします。ある意味で非常に音楽的な語りとも言えます。

乳児達は、あの抑揚のある口調で話しかけられると、手足をバタつかせて同調しようとする動きを見せるのです。それを「引きこみ現象 (entrainment)」といいます。この引き込み現象は、まわりの大人たちがハイトーンで音楽的な抑揚に富んだ語りかけをしている時、乳児が一生懸命反応しようとしている様子として観察されるのですが、大人の語りかけが棒読み調になると反応できずに止まってしまいます。

なぜ私たちはあの語りかけになるのでしょうか。やはりこれも無意識なのだと思うのですが、音楽的に抑揚のある語りかけの方が、赤ちゃんに繋がれるという実感を持っているからだと考えられます。大人同士の会話のようになると乳児はまったく反応できなくなってしまいます。

埼玉大学の志村洋子先生の研究では、乳児の手足につけた加速度計による計測で、母親語の抑揚におけるアクセントの位置と、手足を振るタイミングが一致するという事がわかってきました。つまり、音楽的な語りかけをすることによって、赤ちゃんは大人と繋がりを持つことができるということです。

乳児の発声行動・身体運動

2カ月くらいまでには、母音を中心とした喃語が始まります。6カ月から8カ月頃になると、子音を含む喃語が聞かれるようになってきます。だいたいママとかマンマなどが多いようです。なぜ

「マ」「パ」「バ」が多いのかと言うと、口を閉じた状態から母音をつけるだけで音として作れるためです。またなぜママ、マンマ、パッパァのように二音節の喃語が出やすいのかということについては、これには心音の影響、心拍のリズム感がすりこまれているからではないかという説があります。ただし、確認の方法がないので、推論の域を出ていません。

6カ月から8カ月くらいになると、興味のある音楽にジーンと聞き入る、あるいは興味のある音楽が聞こえてくることを笑いながら、訴えかけてくるというような事も出てきます。

コミュニケーション喃語と発声遊び喃語

9カ月から12カ月くらいになると、「コミュニケーション喃語」というものと、「発声遊び喃語」という二系統に分かれてきます。この内の「発声遊び喃語」が、後の「歌」の基礎ではないかと思えます。「コミュニケーション喃語」の方は言葉の代わりに何かを訴えかける喃語。それに対して、「発声遊び喃語」は、誰に伝えるでもなく、声を出すこと自体を楽しんでいると言えます。喃語に抑揚を付けて、声を出す感覚や聞こえてくる自分の声などを楽しんでいるように見えます。

このころになると、音楽にあわせて体をバウンドさせるように動かすことがあります。バウンディング (bounding) と呼ばれます。リズム的に正確に合っているということではないのですが、音楽に反応して動いてしまうという様子が観察されます。

自発ソングについて

幼児はしばしば、勝手な歌 (自発ソング) をうたっています。不思議な歌です。幼児の自発ソングというのは基本的には快感情の表れです。不機嫌な時、悲しい時に歌う子どもはほとんどいません。子どもが歌いたいのは、楽しい時、嬉しい時、嬉しくなりたい時に歌います。ここで大切にしたいことは、小さい子ども達の音楽表現というのは、快感情の表れ、快感情とのつながりなのだということです。音楽と子どもの関係を強く示唆しています。我々大人はそれをしっかりと認識しておきたいものです。

幼児の自発的な歌の特徴ですが、1歳から1歳

半の時期は喃語的な歌です。音程の幅は5度程度で、一音一音が独立しておらず、ポルタメント的な感じがあります。下降形のものが多いです。下降3度がたくさん出てくるのがこの時期の歌の特徴です。音程、テンポやリズムは自由そのものです。音を探索し、楽しんでいる段階ともいえます。

2歳の頃というのは自発ソングが一番たくさん聞かれる時期です。2歳ぐらいいから3歳ぐらいいの間に、自発ソングのピークが来ます。歌詞が無い曲もよく歌ういます。単語レベル+ a の歌詞が入る歌も出てきます。跳躍進行も多用され、一個一個の音が独立して歌われるようになってきます。曲はまだ、あまり長くありません。この頃には、徐々にドレミファソラシドに対応した音程にほぼ、あてはまるようになってきます。ハ長調なのかト長調なのか、そういう調性のはしりのようなものが感じられるようになります。

3歳から4歳くらいになってくると、ドレミファソラシドにだいたい対応した音程が歌えるようになってきます。フレーズの繰り返しが多くなってきて、曲が少しずつ長くなってきます。4歳近くなってきた子ども達の歌の中には、創作的な歌詞が入る事があります。自分の気持ちを表す歌詞などです。

天才的な自発ソングを作り出すこの能力は残念ながら後の作曲の能力に全く結びついていきません。幼児期には、ほぼ皆さん全員が天才作曲家だったわけです。しかし、大人になって作曲家になれるのは極々一部の人でしかありません。これは自発ソングを歌う子どもの能力と、後の作曲能力が全く異なるものであることを示しています。

模倣ソングについて

自発ソングは3歳ぐらいいまでのところがピークで、そこから先は自発ソングは伸びて行きません。この頃から模倣ソング、つまり真似る歌が増えて来ます。テレビの中から聞こえてくる歌、メディアを通して与えられる歌、幼稚園・保育園で習う歌などです。一人で勝手に唱う歌から、皆で共有する歌の重要性が高まって来る時期です。

子どもの模倣ソングは自分の属する文化圏の音楽的な枠組みを取り入れることが特徴です。わらべ歌や、童謡・唱歌などを通して、私たちは古く

からある音律などに触れていきます。この頃に取り入れた音楽的枠組みは後にも影響し続けます。昭和の歌謡曲には日本古来の音律で歌われているものも多く、それに気づかれないまま聴かれていることも多いようです。

2歳半から3歳になると、自分の気に入った曲の一部を歌ったりできるようになってきます。歌えるところだけ歌う、あるいは一部分を繰り返し歌っています。表現するための音楽のパーツを集めているように感じ取れます。

3歳から4歳くらいになってくると、知っている歌の部分を組み合わせる歌うという事ができるようになってきます。歌い始め途中から曲が変わってしまうこともしばしば聞かれます。調性的にはまだ、不安定感が残りますが、上に行く、下に行くという外形は外さないようになってきます。音楽に合わせて手足を表現的に動かす、お遊戯的な動作ができるようになってくるのもこの時期からです。幼稚園や保育園の参観日に、子ども達が踊って見せてくれたり、年少くらいから少しずつできるようになってきます。

5歳くらいになってくると、正確に、ほぼ一貫したリズム、調性で一曲をしっかりと歌えるようになります。

子ども達が正確に歌える力を身につけるようになると、大人の方に欲が出てきます。もっと上手に唱わせようとして、表現を調整したり、自由な感情の発露を抑圧したりすることも出てきます。ここでひとつ気を付けたいことは、この時期の子どもに、音楽を修行として与えることの弊害です。幼稚園・保育園などで、鼓笛隊とかマーチングをやっていて、かなり苛酷な練習を強いている例があります。行き過ぎ事例も散見されます。それが、子ども達の喜び、楽しみと結びつき良い音楽体験になっているのかどうかは大切な視点です。

終わりに（まとめ）

今日、皆さんにお伝えしたかった事としては、音と人間の関わりは生まれる前から始まっているということです。人間と音楽はセットになっていて、これを切り分けようと思っても無理なのです。したがって、音楽の無い人間というのは存在しないということです。たとえ聴覚がご不自由

であっても、皮膚感覚的にリズムや音楽は存在します。私たちは音楽というものと切り分けて存在することが不可能な存在であると思ってください。

それから、子どもと養育者についてです。これは保育者だったり、親だったりするわけですが、そういう人たちは、子ども達とコミュニケーションしながら音楽と関わって欲しいと思います。音楽を技術として、一方的に注入するということではなくて、子どもの気持ちや、個々の子どもの発達の状態を確認しながら進めていくことが大切です。音楽をコミュニケーションの一つのあり方としてとらえていくことの大切さを考えたいのです。課題を与えて、それをクリアさせることが大切なのではないでしょうか。音楽と人間は本来どのように結びついているのか、そこに深い思いをいたして子どもと音楽に向き合いたいと思います。

それから、幼児期の初期の段階では。自分のためのオリジナルの歌、しかも快感情に基づいたものが主です。幼児期の初期は、その子と音楽との関わりの世界です。その子だけの世界がありますから、それを大事にしてほしいと思います。そこを尊重できずに、調教的・トレーニング的になってしまうと、子どもと音楽の基本的な信頼関係に歪みが生じたり、乖離が生まれてしまったりする可能性があるのです。子ども独自の内なる世界観で、一生懸命に自発的な音楽をやっているということをまずは認めて、そこに積極的な興味関心を向けながら、子ども達の多様な表現を肯定的に受け止めていくことがより重要ではないでしょうか。

幼児期の後期になってくると、習った歌を真似して歌うようになります。幼児期前期とは異なり、みんなで歌うことが重視されるようになります。その時、周りの私たち大人は、子ども達みんなの気持ちをどうやって保証しながら、歌う活動、音楽活動を支えていくのかを考える側にまわる必要が出てくると考えられます。

音楽的発達は、幼児期前期まではほとんど環境差はないと考えられています。1歳2歳ぐらいまでの時期では、人間という生物として、聴覚能力が育ってくるとか、どれくらいの肺活量で声を出せるのかというような、身体発達の要因に左右される事柄が多く、大凡平均的にみんな同じこと

ができるようになっていくプロセスを経ていきます。しかし、幼児期の後期になるに従って、徐々に与えられた環境の影響が非常に大きくなっていきます。音楽が豊富にある環境で育った子どもと、音楽があまりない環境で育った子どもとは、小学校に入った時の音楽的な基礎的能力にかなり違いがあることもわかってきています。

それから絶対音感も4歳から6歳半の間に、鳴った音に対して、何の音という音名の対応づけを繰り返した人にだけ見られます。4歳から6歳半、この時期にやっていなければ、後からつけようと思っても無理です。4歳から6歳半という限られた時間があります。この時期が、音に対する敏感期と言われていて、子ども達が音と関わるために非常に重要な時期であると考えられます。決して絶対音感をつける事が重要だと言っているわけではなく、子どもが音に対して最も敏感で、音との関わりを作っていくには非常に重要な時期であるという意味です。4歳から6歳半というのは、ちょうど幼稚園・保育園そして小学校1年生くらいです。その時期に、子ども達に関わる職種

の人、もしくはその職種に就こうと思っている人は、音楽と子どもの関係というものについて、より真剣に考える側にまわる必要があるだろうと思います。

最後に一言。子どもの音楽というのは、快感情と基本的には結び付いていきます。繰り返しますが、そこで子どもに対して不自然な修行、強烈的なトレーニング、罰をとまうような指導をされてしまうと、音楽を信用できない子どもに育ってしまうと考えます。母子関係でも基本的信頼関係という言葉があるように、音楽と人間の間にも基本的信頼関係が大切なのだと思います。母子愛着関係がしっかりしていれば、様々な困難を乗り越えられる心の源泉になるのと同じように、音楽と人間との信頼関係があれば、音楽があるから自分はきっと大丈夫と思えるような関係を作っていけると思います。そのために大人には、子ども達が純粹に音楽と関われる環境を作っていく責任があるのだろうと思います。この点をお伝えして、今日のお話を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。